

令和7年度 第1回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	令和7年9月2日（火） 13：30～15：00
場 所	芦屋市立美術博物館 講義室
出 席 者	<p>会 長 岡 泰正 副会長 飯尾 由貴子 委 員 鈴木 敬二 委 員 梶本 和男 委 員 溝口 正 委 員 安部 太一郎 委 員 藤山 哲朗</p> <p>（芦屋市立美術博物館指定管理者） 館 長 石井 茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 川原 吉貴 学芸員 大槻 晃実 株式会社小学館集英社プロダクション 今宮 彩夏 グローバルコミュニティ株式会社 鈴木 裕也 （事務局） 国際文化推進室長 田嶋 修 国際文化推進課係長 中村 達也 国際文化推進課主査 竹村 忠洋</p>
事 務 局	国際文化推進課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

（1）議題

- 1）令和6年度下半期事業報告について
- 2）令和7年度上半期（4月～8月）事業報告について

（2）その他

2 提出資料

会議次第

委員名簿

- ・資料1 2024年度 事業報告
- ・資料2 芦屋市立美術博物館 2024年度 展覧会動員実績

- ・資料3 芦屋市立美術博物館 2024 年度 入館者数内訳
- ・資料4 2025 年度(4/1-7/31) 事業報告
- ・資料5 芦屋市立美術博物館 2025 年度 展覧会動員実績
- ・資料6 芦屋市立美術博物館 2025 年度 入館者数内訳

3 議題報告

(岡会長)

それでは、本日の次第に従いまして、ただ今から議事に入ります。

はじめに、議題（１）「令和６年度下半期事業報告について」について、事務局より説明をいたします。

(事務局：中村)

説明につきましては美術博物館より説明させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

<美術博物館 石井館長が説明（資料１、資料２、資料３について）>

(岡会長)

はいありがとうございました。

今、ご説明がございましたが、委員の皆様方、ご意見、ご感想がございましたらいかがでしょうか。

私は、今日時間を間違えて１時に来てしまいまして、この後ご説明があると思いますが、具体美術の特別展を拝見いたしました。この具体の展覧会ですが、元々芦屋市立美術博物館を建てたときも、具体を中心とするという１つの柱がありまして、やっぱりわからないということが、随分評判になって、一般の方にとっては、具体はわからないというのがありました。兵庫県立美術館や尼崎総合文化センターが、どんどん具体を、取り上げて、最先端のアートとして、現代美術に対しての持ち上げ方があって、取り上げて、調べて、大阪も、その芦屋に続いていくということになりまして、逆にボツンと評価が落ちてしまったので、遅まきながら、こういうふうに、やっぱり本拠ですから、本当にオリジナルの場所なので、本当に歩いて砂浜に行ける、こここそということで、やっとうこういうことを、何度も何度もやっているうちに認知されてですね、そんな文句言う人はもうだんだんもう少数派になっていくような感じになって非常に心強く思っています。この美術館には具体が一番似合うんじゃないかというぐらい、よくできた、展示で特に白髪先生の松の木から松の木に色のついた水にはいったチューブを渡す、いろんな形で見ましたが、これほど大規模な本当の大きさで見たのは、私は初めてじゃないかなと思います。一本、二本、デモンストレーションでやられたと思いますが。そのアイデアはやっぱり先進的なものだと思いますので、古びないし、それは本当にちょっと感動したというか。それから上から見られる、中二階、二階から見られる。だんだんこう上がって行って、上から見ると、その当時は、松の木に登るわけにできなかったでしょうから。そういう目線で風景が変わる。非常にその美術館ならではのことでありまして、元永先生の初期の作品にしても、白髪先生の初期の作品にしても、本当に芦屋だから意味があるというふうに思いました。これを何とか市民の人たちに、共有し合って自分たちの文化財のような気持ちで盛り立ててもらえないかなという、そういう空気を作っていけないと思っていますが、講演会の講師の御名前を今拝見していて、兵庫の近代美術館におられた人ですが、みんな具体を愛する人たちでもありますし、そういう人たちの講演会が、この 105 名と一番多いのも、やっぱり認知して、

1つのメッカとして、アピールされている良い企画であった。この講演会も含めて、具体も説明を聞いたら、「わかる」と、感じた次第です。それでは、委員先生方に、ご意見を。まずは、飯尾先生お願いします。

(飯尾委員)

ご報告ありがとうございます。昨年度のご報告について、感想を述べさせていただきます。岡先生もおっしゃったように、具体の本場であることから、具体を核に展覧会を構成されていて、最初は具体の総論、今井祝雄さんの展示で具体の各論という形でしっかりおさえられている。それから芦屋の文化財再発見は、歴史に焦点をあてた素晴らしい展覧だったと思います。一年を通じバランスよく展覧会が構成されていまして、やはり、具体は本家本元ということで、現在開催されている展覧会も、美術館の空間を生かした圧巻の展示で、素晴らしい視覚効果があり大変感動を受けました。まなびはくでも展覧会と関連した普及事業が行われていて、内容ともに質量ともに充実しているなど、毎年感心しております。具体に関してはわかりにくいというご意見も長らくありますが、今回も色々ハンドアウトとかつくられて、文字で説明しようと試みもされていらっしゃると思いますので、やはり継続的に具体を、手放さず、本家のプライドを、持って続けていただきたいと思います。兵庫県立美術館は貴館の活動に学ぶところも多いので具体をどうか手放さずに、来年度以降も展示をお願いしたいところです。

(岡会長)

ありがとうございます。鈴木先生お願いします。専門家の意見ばかりでなくても、他の考え方もちょっとお考えいただいて、皆さんを指名いたしますので。

(鈴木委員)

2点お聞かせいただきたいです。1つは、端的に聞きまして、総入館合計2万5000ぐらいというのは、健闘されているとお感じになっているのか、ちょっと足りない感じになっているのかという事と、もしちょっと足りないとお感じになっているのなら、これ、コロナ禍前と比べてどうですか。私どもの博物館は恥ずかしながらコロナ禍前から、なかなか戻りきってないと感じております。そのあたりどういう感触か聞かせていただきたいです。

もう1つは、これは感想です。運営基本方針の中には、当美術博物館様が、使命を書かれていまして、拝見しながらこの事業内容を聞かせていただきまして、バランスが取れており、それぞれ当てはまっているものが、配置されているかというふうに見られました。文化遺産の継承というのは、おそらく歴史に関するテーマが文化遺産の継承になるのかと思いますし、2人の先生が、具体が芦屋の財産とおっしゃったので、それも文化遺産の継承に入るのかと思います。学習機会の提供については、教育普及活動全般がそれに当たるでしょうか。市民参画でも、私も拝見したいなと思っていますが、あしやつくるばというような参加型を設けられている。子どもへの教育というのはまた、これとはまた別に見えない所で活動されているのかなと思っていまして、そういう意味では、市の目的を達成するため、博物館の現場の方、それから設置者管理者の方が、相談し合って、こういう面のプログラムを作られて、それが実現されているんだなと感じられたというのが感想でございます。

(岡会長)

今のご質問に対していかがでございますか。

(事務局：石井館長)

2024 年の数字を今お話いただきましたけども、総人数で 25,085 名というのは残念ながら目標にしている数字でございまして、前回のときに、私どもの 13 年ということで、表を作って、お渡していますが、今までで一番多かったのが 4 万人ぐらいです。それでその時に、この会での話だと思いますが、大体このぐらいの規模の展覧会、展示をやる施設として、大体目標どこに置いたらいいかということを経営者の方でお聞きした時に、その時の委員の方々が、5 万名前後で、5 万名ぐらいということで、それぐらいと思っておりまして、とはいえ、その時は最大 4 万人で、平均 3 万人を超えている中盤ぐらいが通常だと思うんですね。この年は、展覧会をたくさんやっておりますし、学芸員もいくつかの展覧会を掛け持ちでやっているということで、4 月には、具体の展覧会、コレクション展をやっておりますし、これは美術の学芸員が 2 名でね、やっておりますし、そのあとは信濃橋洋画研究所、美術のテーマをやっておりますし、それから具体の今井祝雄ということで、かなりレパートリーとしては 3 つぐらいを多く、やっておりますし、そしてあとは歴史の展示というのは、この建物でわかると思いますが、上の方を歴史で使うのはなかなか範囲が広い面がありまして何とかできない面もありますが、やっぱり芦屋の文化財をやっぱり定期的な大きな展覧会をしなければいけないということで、何年ぶりかで、大きなスペースをいただきながら、先ほど説明しましたようにいろいろ講演会をさせていただき、イベントもさせていただきましたが、目標の数字にはやっぱり達していない。あとは、造形教育展などいろいろやっていますが、かなりレパートリーとしては人数が少ない中多くやっておりますが、幅広くはさせていただきましたが、なかなか増員が目標に達しなかったというのが結果です。

(鈴木委員)

感触で結構ですが、コロナ禍の前頃にはまだ戻ってないという感触ですか。

(事務局：石井館長)

そうですね。コロナの影響、だんだん、全体的には戻ってきているのかちょっと私はわかりませんが、まだまだその部分は残っているかもしれない。決して数字が上がってはいないので。まだまだ少し影響あると思います。

(鈴木委員)

そこは共感できる場所と思ひまして、質問させていただきました。

(岡会長)

今の資料に基づいてということで、梶本委員どうですか。

(梶本委員)

具体的な事で。色んな催しをされていますが、私がこれ面白いなと思ったのが、事業報告書資料 1 の 2 ページ目の下から 4 行目「最新のヨドコウ迎賓館温室跡発見まで」11 月 30 日からありまして、見応えがありました。それからこの資料の 4 ページ目の下から 4 行目「ホールコンサート ヴァイオリンとピアノで巡る和のハーモニー」2 月 2 日開催。なかなかホールでやるコンサートは良いなという感想です。あと、色々催し物を開催されていますが、残念ながら、これは自分にとっては、興味のあるのはなかったので、観には来ていません。それから全体の観覧者の人数ですが、私も芦屋川カレッジで、催

しの企画やイベントの参加者増員を図る仕事にしていますので、先ほど、この館全体の入館者がコロナ禍前に比べて、あまり回復していないという発言がありました。芦屋川カレッジも前は、ルナホールで、いろいろ講演会をしておりました。その増員数を見ていると、1日当たり、1回当たり、200人から250人ということで、5年ぐらい前でしたら、350名入った時もあります。ルナホールの定員は650人なので、350人はかなりの人数です。それが今現在は多くて200人、ここまでしか回復していない。カレッジの委員のメンバーに聞きますと、やはり出にくくなっています。コロナ禍を経て、外に出る習慣がなくなったのではないかということがありました。こちらの館にもそういう印象があります。

(岡会長)

人の集まるところに寄っていかないようにする、出控え。

(梶本委員)

そうですね。そういう習慣というか、出にくくなるような習慣がついてしまったのではないかという印象があります。

(岡委員)

客商売には一番駄目な事ですけど。

皆さん、同じテーマでなくても構いませんので、お話をいただきたいと思います。初めてになります溝口さん、何かご意見ございましたらどうぞ。

(溝口委員)

ずっと小学校のPTA活動をやっているので小学校目線で見させてもらおうと、やっぱり友達の話とかも聞いていても行く人と行かない人で真二つに分かれています。よく、ここの美術館行く家庭もあれば全く行かない。その全く行かないっていう人は、小学校でもこういう何か催しがあると、プリントとか、子どもが持ち帰りますが、見てないのかなあという気がしています。うちは妻が結構好きなので、子どもとここに良く来ていますが。あと、資料3、見せていただきますと、小中学生が2月に極めて多いというのは、何か原因がありますか、1600名ぐらい入館されていますよね。

(安部委員)

市内の造形教育、市内幼小中の造形教育展。

(溝口委員)

それがあるとやっぱり小さい子どもたちもいっぱい来られる。なるほど。それこそ前半の時期に1回とか2回することは、無理ですか。これ2月だけですよね。夏休みぐらい、もう1回。

(事務局：田嶋)

造形教育展、その時には皆さん来ていただいています。ただ、どうしても細く長い市なので、北側の方は、これは本当に課題ですけども。美術館の場所が南に位置していますので、そういった部分では北の方がなかなか足運んでいただくというのは交通の便も、立地というのもありますが、2回やるという

ことは、まずあの学校側とその作品をいつ出してもらうかという、これはすごく調整をしまして、その中で選んでいて、全員分を展示しているわけではないので、学校側には、何年生のどのぐらいでどういうテーマでというので、用意していただいております。その時期となっているので、学校の先生が大変な中で、調整するのは非常に困難な状態です。ご希望されている意味はもちろん、子どもたちが来ていただくということで親も一緒に来るので、本当にありがたい話でそれがねらいで、始めているというのがありますが、なかなか2回というのは今、プログラムの的には難しい、夏というのが、またこの夏から秋にかけては美術博物館のかき入れ時になります。造形教育展は、無料でやっていますので。ちょっとそこで、運営の関係とかいろいろ難しいかなと今考えています。

(溝口委員)

ありがとうございます。

(岡委員)

安部先生どうぞ

(安部委員)

私は芦屋市立精道小学校といたしまして、この美術博物館から10分15分ぐらいの距離にある小学校に勤めています。今のお話にありました芦屋市の造形教育展にも出品をもちろんしております。市内は、小学校が7校で中学校が3校。幼稚園、保育園とその合同の展覧会で、各学校で、1月終わりぐらいに図工展があります。毎年やっている。図工展が終わってからみんなの合同展という形になって、これ長い間この流れで来ているので、2回とか3回、もし機会があれば、うれしいお話なんですけど、なかなかそれをしようと思ったら学校の教育課程の中でのということになってきますので、結構大変かなあと先ほどのお話聞いていて感じました。小学校、ここから近いところで、図工の授業をしています、「隙あらば猫」これ町田さんの作品で、絵本展覧会でしたが、図工室にポスターを貼らせていただいたりとか、チラシを置いたりしている中で、子どもたちが、普段は万博行ってきたとかいろんなこと言ってくるんですが、この「隙あらば猫」は何人もの子が、お母さんお父さんで行ってきましたと子どもたちから言ってきました。やっぱりこの動員観客動員数ですね資料5のところも7228、有料無料と書いていますが、やっぱり子どもたちが行きたいという展覧会は、子どもたちだけでは行けないと思います。うちのひとと来られるので、その分、芦屋市造形教育展みたいに人が入ってくるというのが大きいかなと思います。それと精道小学校は、この具体美術の方が活動された芦屋公園が近いので、子どもたちに馴染みのある場所です。私も授業の中で、具体美術の活動とかは、子どもたちに話はしています。学校によってちょっと話しているところ、してないところあるかもしれませんが、具体は芦屋の財産というお話が先ほどありましたので、これから子どもたちにも地域で、こういうグループがあって活動した。世界的にも有名になっていたというのは伝えていきたいと考えています。そして今年もまた12月に、学芸員さん、大槻さんと川原さんに、学校に来ていただいて、ゲストティーチャーとして来ていただいて、授業を計画しています。学校としてはいろんな取り組みをしていただきたいと考えていますので、また、良い事があれば教えていただきたいと思います。

(岡委員)

はいありがとうございます。市民委員であります藤山さん、お願いします。

(藤山委員)

ちょっと具体的話が出たので具体的話ですが、最初、どちらかというと具体は何回かやっているし、結構2、3年前に中之島で結構大きな展覧会があったので、どうなのかなと思っていましたが、結果から言うとてもよかったです。すみませんという感じで。特に、やっぱり地元としては、今回具体的中でも、ルナホールのフェスティバルですとか、ビエンナーレの話とか、あまり聞いたことがなかったのが、改めて知ることができて、改めて、地元が発信の場だったというのが、結構実感出来ました。ちょっと今回、割とそういう文献の資料などが多かったのも、ちょっと展覧会に来てそれをちゃんと読むのは大変だったので、もうちょっと詳しく知りたいなと思った展覧会でした。あとは、来館者については、もう1つ思うのが、これ前回の会議の時に、年間の計画を聞いて、ここの特徴は、美術もあるし博物もあるし、それから色々な事をやっているのを1年間にやらなくてはいけないというのが大変なんだなと実感しましたが、逆に言うと、近所にいる者として見るといつ行っても、今日何をやっているのかわからないけど、とりあえず行ってみたら面白いというよりは、何をやっているのかを見てから行くようなタイプの美術館だと少し感じています。あとは、小学校は、さっき言ったような子どもたちの造形教育展をやっているのも、できれば、こういう地域の美術館では大人は来るとは思いますけど、やっぱり子どもたちが来る、来れるようなところは、すごく大事をだと思って、もう少し中高生が、安いとより良いと思います。猫のときは、猫の写真の展示は、面白いと思いました。地域の人たちにいろいろ写真送ってもらって。そういう参加型のイベントがあると、特に、子どもたちも喜ぶと思ったので、そんなことできるかわからないですけど、何か、他のところでもやっているお泊まり会みたいな、そういうのもここで、何かやれたら面白いかなと思いました。

(岡会長)

はい。ありがとうございました。

一応皆さんには課題の1に関しましては、ご意見をいただきました。まだ言い残したまだちょっと質問したいという方はおられますでしょうか。そうしましたら、またまとめて、あとお話をいたしますので、では課題2ですね、令和7年度、上半期(4月～8月)の事業報告について、資料の確認から、いただければと思います。

<事務局 中村 資料の確認>

<美術博物館 石井館長 資料4～8 を説明>

(岡会長)

私から質問ですが、浮世絵展というのはまだですが、具体的にはどこのコレクションでどのぐらい、何点ぐらいになるんですか。

(事務局：川原学芸員)

はい。浮世絵展は当館所蔵の片岡コレクションでして、江戸時代から昭和初期にかけて芦屋在住の片岡さんが収集したコレクションを展示する計画です。

(岡会長)

前に出されました？

(事務局：川原学芸員)

はい。出したことはあります。今度の展示は、片岡コレクションをメインに据えて、他のコレクションなどからは借入をせずに、片岡コレクションを前面に打ち出しているのが前回とは違うかなと。

(岡会長)

何点ぐらいなんですか。

(事務局：川原学芸員)

現在のところは 100 点ぐらいです。

(岡会長)

それは 3 枚続きとか 1 点と数えてですか？

(事務局：川原学芸員)

はい。1 点と数えて、それぐらいで、できればと計画して進めています。

(岡会長)

これ図録とか出ていないですよ。どういうコレクションなのか、やっぱり浮世絵展では、もう何のことかわからないので、どういうテーマでやっているとか、どういうものを、やっぱり、どんなものでも必ず、メインのものとかビジュアルイメージポスターにするようなものが必要ですよ。目玉というか、それはどういうことになっていますか。

(事務局：川原学芸員)

浮世絵を通じて江戸時代の生活や風俗などを知っていただく、体感していただくということで、考えておりまして、チラシなどを、現在作成中なんですけど、その中でも当時の暮らしぶりです。人々の、例えば子育てとか、職業、衣食などそうした日常の 1 コマ 1 コマというのを浮世絵から見ていこうような展示にしていこうと思います。

(岡会長)

これアドバイスですが、浮世絵は 1 月お正月に似合います。だからヴィクトリア&アルバート美術館展の浮世絵展をやった時もお正月に合わせた、日本人が伝統に戻るといふそういう時期なので、うまく時期がお正月にかかりますから、結構展示日数も長いので、大丈夫かなと思うぐらい長いので、そういう吉祥性とか、何かそういうふうに使掛けを作って、うまく使われないと浮世絵展では、ちょっと、ただ生活風俗を見るとか、で使ったものも、18 世紀じゃなくて 19 世紀の方が多いです。だから江戸後期の明治前期の生活風俗とかは文明開化のものも入ってくると思うので、ただちょっとうまくストーリーを作られるようにされたいと思います。いや、それがたまたまこれしかないの、片岡コレクションを私拝見したことがないので、うまくお正月に来ていただけるように、使掛けを考えられたら良い

と思います。

また、こうしたらいいなどアドバイスがありましたが、ご意見をいただきたいと思います。

(藤山委員)

大体、先ほど、今年度の部分もまとめて言いましたが、あと1個思ったのは、今回具体みたいな、この美術館は、あそこの真ん中の円形ホールが大きくてそこが難しいところだと感じていたので、現代美術だとやっぱりインスタレーションみたいなとか、とてもうまく使ったり、今井さんの時は、テーブルで、そういうのが使い切り入れるんですけども、ちょっと、浮世絵みたいな、こういう商品になると、ああいった所を、使う難しいだろうなと感想ですけれどもそう感じています。

(岡会長)

おっしゃる通りです。照度が50ルクスというと、浮世絵とか、木版画とかね。50ルクスというと、もう本当新聞がやっと読める明るさなので、周りが暗かったら、今LEDになったので、色は白く出来ますが、なかなか厳しい照度ですね、特に期間が長いと。油絵でも今韓国国立中央博物館とやりとりをしています、油絵でも50ルクスと言ってきているので、ちょっと信じられない、条件を課されるとそれを守らざるをえないので、ちょっと暗いとか苦情が出たりします。ただ本当おっしゃる通り元永先生の作品とか、現代美術がぴったりだと、これ以上の場所はないなと今回も思いました。ただどうしても入館者ということになると、やっぱりアプローチが大事なので、いきなり入ってばーと浮世絵が並んでいるよりは、徐々にその世界に入っていくようにということが大事だと思う。ありがとうございました。

(安部委員)

浮世絵展、コレクションというのが、結構面白い。しかも芦屋の方ですよ。なんかそこが面白いなと思いました。ワイズバッシュという人の展覧会を大分昔に芦屋の美術博物館でされました。これも芦屋の人のコレクションでした。

(岡会長)

ワイズバッシュだと音楽を合わせてやれそうな感じですね。バイオリニストとかを考えると。

(安部委員)

今ちょっと思い出したので、こういう芦屋の方のコレクション展みたいな、もうすぐにはできないと思いますが、可能でしたら、これから何年か先とかでも、面白いかないかと思いました。ちょうど浮世絵展の後が、芦屋市造形教育展、子どもたち、その出品者、それからおうちの方も来られます。この美博の近くの学校が図工の時間とか、学年の先生と合わせ、鑑賞にこられたりもするので、そのタイミングでこの歴史の常設展の所で、今年いきなり難しいかもしれませんが、結構だんじりをやっている子が結構います。海側も山側も。だんじりなどの展示が普段はないと思っていましたので、芦屋の子どもたちが普段携わったり、参加しているだんじりとか。そういうお祭りの内容を常設展でも入れてもらえたら、子どもたち自分たちの作品を見て、常設展にも足をこれからも運んでいけるきっかけになるかなというふうに思いました。以上です。

(溝口委員)

美術の事はちょっと疎いですけど。5番の造形展、2月は楽しみにしています。それと、この資料の前の1で、5ページ、ちょっと、個人的に目を引いたのは、まなびはくルームで講師として、グラフィックデザイナーが来られていますね。全然知りませんでした。こういう子どもたち、興味あるので。今、結構学校の授業でも子どもたちが、タブレットで、即興で人前で発表するということをやっている、そのとき結構、タブレットでちゃちゃちゃと絵を描いています。そういうのも、こういうのがあると知っていれば、興味があって良いのではと思いました。以上です。

(梶本委員)

資料5に載っています浮世絵展、先ほど会長が言われましたように、キャプション付けたら良いなと思います。これだけでしたら何かわからないので、江戸中期、江戸後期の生活様式がよく見えるような形になればいいなと思います。5番目の芦屋造形教育展。これはぜひとも子どもたちの参加型になるような、展示物とかを含めまして、是非とも小学生の皆さんが参加できるような形に持っていったらと思います。

(岡会長)

ありがとうございます。参加型はどうしても学芸員の手に余りますよね、どうしてもね、我々もやりますが、結局神戸大学のそういう造形教育の、大学院生さんとか、学部生さんとか、そういう人たちに一緒に参加していただくとかですね、もう目星をつけてお願いして、ボランティアです。全く交通費も出ませんが、自分たちの学びにもなってもらえるような、何かそういうワークショップを幾つもつくるとか、そんなふうにしていかないと、学芸員1人がもうそれをやるというのはやっぱり、どうしても無理があって、それは体力的にはなくて、アイデアとか、いろんなことがやっぱりその造形教育の方、教育現場の方と、実際に子どもたちと触れている人じゃないと、アイデアが出てこないですね。学芸で学問学術の美術史などをやっている人が多いので、ですからそこら辺の何かこううまく、うちは神戸大学の昔でいう教育学部の方とやっていますが、そういう先生の教え子さんを連れてきていただいて、その人たちも1回覚えると今度はリーダーみたいになって、ボランティアの人を教育するとかっていうふうにして、何年かやっていかないと、なかなかこう形になっていかないですよ。ちょっとそういうことが、今この美術博物館で余力があるかどうかはちょっとありますが。なかなかそのワークショップを維持するとか、子どもに満足させるとか、そういうのはすごく難しい。それで何か思い出になってもらったらいいと思います。

(鈴木委員)

3点あります。1つは、皆さん、興味津々の浮世絵展について、岡先生もおっしゃったように会期が長いと思っていまして。照度の事も出ていましたけど、多彩色の木版画ですので、変食も結構しやすいと思いますので、展示替えが必須かなと思っております。それだけのコレクションもあると思いますので、そこはうまくローテーションで、やっていただきたいなと思っております。私どもの展覧会の会期は、基本44日間です。照度を絞りに絞って、44日間で、必ず途中で展示替えを行っておりますので、作品にやさしい公開と保存の両立した展示の仕方をやっていただければと思います。2つ目は、今年度も教育普及事業はたくさんやられておまして、これだけアイデアが出てくるのは、素晴らしいなと思っております。先ほど、ワークショップ等々については、子どもも興味を持ちそうなものがあると

しゃっていただきましたが、頭から、子ども対象にしているものですか、もしくは、障がいのある方が参加できるという前提のものがあれば、教えていただきたい。そういうのがあれば私たちも、参考にしたいなと思います。美術館と比べまして、歴史博物館は、市民の方県民の方からものすごく敷居が高いように思われる存在でして、歴史が苦手だから行ったら駄目なのかなと思われがちな施設でありまして、なるべく敷居を下げるような取り組みしたいと思っており、私どもも、教育普及事業の中で、多様な方に参加いただけるようなものをと考えているところですので、逆に私たちが勉強させていただき、教えて頂きたいと思います。これはどういう観点から、これはこういうターゲットで、特に考えているというのを教えていただきたいと思います。それから、ちょっと余計な事を申し上げます。造形教育展で、子どもたちの教育に関する展示をされると。それでたまたまワークショップをされることに対しては、岡先生から、造形教育専門家との連携が必要だとおっしゃっていただきました。それをされてもいいのではないかとおせっかいながら感じた次第でございます。芦屋、それから阪神間の美術教育の事情をあまりよくわからないまま申し上げて大変失礼ですが、博物館事業全体を定義する博物館法がご存知の通り改正されまして、地域の多様な主体との連携が努力義務として書き加えられています。姫路の歴博がどれだけ出来ているのかと言われまして、実はまだ模索している途中でございまして、これからちょっと手を広げないといけないところです。そういう美術教育の専門家と連携を新たに模索されてもいいのではないかと考えております。私どもは、コロナ禍の頃に、兵庫教育大学の方と連携協定を結ばせていただきまして、ちょうど私たちが敷居を下げたいなと、子どもたち、来てもらえるような、博物館にしたいなという時に兵庫教育大学と連携協定を結ばせていただき、そこで、社会教育の専門家の先生と結構な頻度で、コロナ禍でしたので、オンラインでやり取りさしていただき、それで様々ワークショップシートの開発ですとか、教育普及事業のアイデアを出し合ってちょっとやらせていただいことがございます。それが、今までやってなかった連携の形として、非常に、効いてきているなど。まだ種をまいたところで、これからちょっと水をやって育てていかないといけない段階で、全然偉そうなことは言えないですが、博物館法改正の精神に合うかなと考えておりまして、今すぐできないとしても、模索されてもいいのかなと思いました。2番目の説明の質問で、これは子ども向けですよというようなワークショップのようなものが教育普及事業であれば教えて欲しいです。

（事務局：大槻学芸員）

教育普及事業としてまなびはくルームというのを今年度もしていますが、最初立ち上げはびはくルームという名前で、子どもが参加しやすいようなプログラムを組んでおりまして、それは10年ほど前に、スタートしました。私はちょっと作り手ではないので、外部から作家の方、今活躍されている現代美術の作家の方などにお越しいただきまして、講師になっていただいてワークショップを行いました。それが5、6年続きました。で、そのあと他館でも、子ども対象のプログラムというのはよくされますので、当館の特色というか当館でできることは何かなというふうに考えたときに、大人の方も参加してもらえるようなワークショップも考えまして、子どもだけではなくって、幅広い年齢層に参加していただけるワークショップを心がけて、行っていた中で、その後ちょっと大人に特化したまなびはくという講座を中心の教育普及事業を開催するようになりました。そのあと、コロナがきまして、そのあとは、びはくルームとまなびはくルームを合体させたまなびはくルームを行うようになりました。基本的にその子ども対象というと、展覧会の関連イベントとして開催するものとは別に教育普及事業のまなびはくルームを行っているんですが、子どもだけではなく大人の方も一緒に、同じ場で作っていただくということが、子どもたちにもいい影響があるかなと思いますし、大人の人にも子どもの柔軟な、アイ

デアというものが近づいてみて、一緒にできるのかなと思ひまして、やっております。今回関連、「具体美術協会と芦屋、その後」の関連イベントとして、元永定正の“流し”の絵画の体験というのは、本当に子どもさんと大人の方にも参加していただきまして、あの作品、2階にある、また後程ご紹介する、絵画作品は流しのポイントが流す部分というのは、実は1ヶ所だけなんです。その1ヶ所からどう流れていくかっていうことを、元永さんはすごく考えて偶然をどこまでどう入れられるかということを考えてながら作っているということを、今回、今日ちょっと出席していないんですけれども、もう1人の学芸の川原が、元永さんの奥様に、政策の話聞きながら、ワークショップを組み立てた内容になっております。このように子ども対象というだけではなく大人も対象、大人の年齢も対象になるようなワークショップを行っております。先ほど障がい者の方のお話があったのは、去年の2024年の今井祝雄さんの時に、たんぽぽの家という奈良の障害者の施設、利用者さんが来ている施設がありまして、そこの方が、組み立ててくれた今井祝雄さん作品を、目の不自由な方と、正眼者とペアになって作品を見ていくということをしていただきました。この参加いただいた障がい者の方も、プログラムを組むということは専門ではないので、たんぽぽの方にご協力いただいて開催したということがあります。

(飯尾委員)

報告の内容から、3つ質問ですが、教育普及事業に関して、具体8月9日の加藤先生の講演会ですとか、8月17日のこちら学芸員の講演会ですとか、7月6日の大島先生の具体の講演会、いずれも50名強で、かなりの聴講者が集まっていると思っています。これはイベントの直前に何か、ホームページ等で広報を強化されているのでしょうか。あとは、先ほどの説明でありましたまなびはくルーム、今年のB、Cですが、今年は展覧会と関連されているのかどうか、特に関連されていないように拝見していますが、これは、色々なご関係の経緯で計画されていると思いますが、何かしらリンクされているのかということ、あとは、浮世絵展に関しまして、何か関連イベント、行事、講演会などは、ご予定されているのでしょうか。

(事務局：大槻学芸員)

広報についてですけれども、今回、3つの講演会に特化して別にチラシを作るということはありません。ただ大島先生の講演会についてはこのまなびはくルームのAの部分で、こちらで、まなびはくルームの講座でもあった本講座ですので、このチラシでもご案内させていただけたかと思いますが、参加されたメンバー、参加くださった方々を見ると、すべて来てくださった方が重複しています。だから、具体はアンフォンメルの部分で紹介されるというか、取りざたされることが多い中で、アメリカ抽象表現主義と具体というテーマが、多くの方が感心を寄せただけの要素ではないかなと思います。それと、やはり加藤先生に、お話いただいた大阪万博については、今回、今、開催中の万博ということも含めて、興味が関心を持っていたかのかなということがあります。あと最後に、私が担当させていただいたのは、あんまり聞いたことがない内容だったということで、本当に、結構来てくださったのはありがたいことでした。なので、これを、特にいつもとは違う特別な方法というのをやっていないです。なので、岡先生がおっしゃってくださったみたいにその具体をこう、少しずつでも今持ち続けて継続して、いろんな事業を行わせていただいているということで、具体の何かをするのは、芦屋であるかなというのをちょっとほんのりとでも、予感をさせていただいているような状況ではないかなと感じています。まはびはくルーム、Bは、日本酒になりまして、山崎隆夫さんがサントリーのトリスなので、その会期中に日本酒、この洋酒の文化と、あと西宮と神戸の酒造業がすごく発展している中でどうして芦屋だけ

ないのかということがありましたので、それを白鹿の学芸員、大浦さんに考察していただいたものを今回まち歩きをしながら、ご紹介していただく予定です。この谷崎潤一郎の挿絵を読み込むというのは、これは展覧会とは別ですけど、隣の谷崎潤一郎記念館と何かコラボレーション出来ないかと思っておりましたので、それで今回まなびはくルームは展覧会に、特化しなくてもいい、内容が組めるという利点を生かしまして、Cを組ませていただきました。

(岡会長)

ありがとうございました。抽象表現主義というと、みんな難しいということになりますが、具体美術自身はグリーンバーグにしても、アメリカの抽象表現主義、そのあとのポップアートとか、そういう50年代から60年代の影響があつての話です。それと、藤田嗣治のような、フランスのエコールドパリで活動した人たちが、その吉原治良にショックを与えていくということが、神戸という町での出会いがあつたりするので。そのバックボーンがわからないといきなり具体が出てきたわけではなくて、それを徐々に知らしめるというか勉強してもらおうとか高校生でもそういうことを知ってもらおうということが大事で、「博士ちゃん」を作らないといけないとは思っています。それと、何度も言っていますが、具体はやはりインスタレーションですね。それはわからないというところから始まるのでありまして、形がないものですが、形のある、つまり上手に描いているとかこれは本物に見えるという写実とか、小出檜重、写実からもちょっと遠いですけども、何度も言っていますが、芦屋の美術って、伊藤継郎先生にしても、小出檜重にしても、新たな関西ならではの情動的な写実の系譜というか、絵画全部が具体に集約されるわけではないので、2つの柱であつてもいいと思います。せっかくアトリエもあるので、小出檜重の世界ですね。信濃橋展でこの前は本当によくやられたと思うので、ああいうのも忘れずに美術館に行ったら両方が見られると、もうこれだけと、今日はもうこの料理だけですとか、アラカルトだけですというチョイスがなかったら、ちょっと寂しいなあと思って、そうするにはもう1つ常設展示室が欲しいですね。本当は。アトリウムが似合いますが、2つの展示室しか持っていないので特別展的にやろうと思うと2つ使わざるをえないので、ちょっと常設の事はいつも言っていますが、具体だけでなく、こういうのもありますよと。初めて訪れた人は満足度が低いと思います。本当に常々それは思っていますので、スペースをどう作るかと。今回、キネティックアートっていう動く芸術の音が出るのをちゃんとこう壁で仕切って、ちょっと隔離していましたよね。あれ、すごく感心しました。苦労しているなという感じがしました。動くものはね、本当静かなやつに、環境を壊すことがあるので、あれは、うまくやられているなというか学芸の人が非常に苦労して、陳列されているのはよくわかりました。とにかく今回は、アトリウムの使い方が、ホールの使い方が非常に感心しまして、こういうふうによればいいなあという。展示室として一体化するなというふうに思いました。

(飯尾委員)

もう1つ、さっきのご質問ですけど、浮世絵展に関しては何か行事は、予定されていますか。

(事務局：川原学芸員)

先ほどからご質問がありました浮世絵展のタイトルですが、まだ仮のもので、変更するかもしれませんが、ちょっと一応ここで、説明させていただきますと、「徹底解剖！浮世絵展で見る江戸のライフスタイル」と考えております。サブタイトルは、春信・歌麿・国貞・英泉、そして芳年の描いた「粹な」女たち」と考えています。関連イベントについては、ホールコンサートは評判がいいので、浮世絵の中

には、浮世絵の中には、当時の江戸時代の楽器、三味線、尺八、琴などの楽器を描いたものがありまして、正月1月10日予定ですが、尺八と琴のホールコンサートを計画しておりまして、お正月ということで、春にちなんだ曲とかそれと現在のよく知られた曲、メロディーのコンサートを計画しております。それから、サイレント映画上映もありまして、それで、戦前の日本の暮らしが浮かび上がるというか学ぶことができるかなと思います。サイレント映画で江戸時代から明治にかけての日本の当時の様子を上映する。それから、子ども向けのイベントを教育活動、としては、浮世絵にちなんだ絵画教室を、冬休み中にやれればと計画しております。

(岡会長)

サイレント映画はどこでやりますか

(事務局：川原学芸員)

ここで、講義室で行います。

(岡会長)

大体そういうのは何時から。コンサートとかも、閉館後ですか。

(事務局：川原学芸員)

ホールコンサートは午後、2時から。サイレント映画についても2時から3時半ぐらいです。

(岡会長)

ありがとうございます。頑張ってください。浮世絵展は、料金はいくらですか。

(岡会長)

浮世絵展、料金は1000円。全て所蔵品？

(事務局：川原学芸員)

はい。

(岡会長)

歌麿はあって、春信はない？

(事務局：川原学芸員)

複製品です。大正時代の複製品が幾つか。歌麿は複製品です。

(岡会長)

複製品のコレクション？

(事務局：川原学芸員)

それもありますが、それは一部です。それ以外の国貞、英泉はオリジナル。

(岡会長)

歌麿は、複製しかなくて、一点もないの？

(事務局：川原学芸員)

はい。大正時代の複製。

(岡会長)

それちょっとタイトルに謳うのはどうかしら。はい。わかりました。

はい事務局の説明終わりました。時間的には大体こんな感じと思っていますが、他に言い残したことがありますたら、ご意見ございませんでしょうか。

(鈴木委員)

ちょっと断片的なこと聞いてすいません。ホールコンサートされるということで、コンサートの演奏家どうやって決めていますか。オーディションをしているんですか。あと、私やりたいですって売り込みとかないですか。実はうちもありまして。このような具体的なことすいません。

(事務局：石井館長)

関わりのある市民の音楽系の方がずっといらっしゃっていて、協力していただいている方がいます。その方が音楽をされている方なので、芦屋市内を中心に幅広く、知り合いの方がいらっしゃるので、ちょっと提案して、例えばさっきありましたけど、三味線と琴とか誰かいませんかねと相談すると、引っ張ってきてくれる、そのパターン、そういうパターンが非常に多く、あと、クラシックは芦屋市内、それなりの方がいらっしゃるので、日常的につき合いのある方に、大体お願いしたりします。

(鈴木委員)

協力者からご提案いただいてということですね。わかりました。

(岡会長)

オーディションをされていますか。

(鈴木委員)

いや、同じようにやっています。うちにそんな音楽の専門家はいませんし、同じように協力者の方に提案していただいています。

(藤山委員)

先ほどから結構教育の話が出ていますが、芦屋は、来年ぐらいですかね、中学校の部活が、学校じゃなくて地域に地域クラブに移ることを聞いていますが、野球とかそういうのは何となくイメージできますが、文化系の部活動というのも、こういう、例えばこういう美術館とか博物館とか、そういう、地域のところと連携するみたいなことはありますか。

(事務局：田嶋)

文化系につきましては特に美術の審議会でありますので、美術関係につきましては、まだ全然決まっていな状態です。本当に今教育委員会の方が主になって、言うたらスポーツ系、文化系、かかわらずですね、今どういう形で取っていくかという形で今進めているところです。やっぱり個別でいろいろなこの団体と契約っていうのは難しいので、どっか、それをやっていただける方を探しているというような状態だと思いますが、そういったところからスタート。そこで、エントリー制になってくるかと思うので、エントリーを募集して、その方を、指導者としていう形になるかなと思っています。ただいまちょっとそこまではいまだ至っていないかと思っていますので、今後どうしていくのかというところだと思います。本当に音楽系であれば、音楽系のところで今、先ほどもありました、地域には多くの方が多くできる方というのはクラシックであったり和楽であったりとかいうのもいらっしゃるんですけども。美術系っていうのはなかなか手を挙げていただくというのは難しいのかなと思っています。そういったところも含めて今、もう少し時間を置きながらですね、進めていきたいと思っています。

(事務局：大槻学芸員)

回答になるかわかりませんが、今回の具体展の時に、潮見中学校の美術の先生が、具体を見て、具体の作品で、対話型観賞ができないかと考えられて、市内の中学校の美術部の先生と西宮の美術先生20人ぐらいと、今回研究会をしてくださって中学の学生さんに展覧会とかを作品を観てどういうことができるか、先生方が色々研究していきたいとおっしゃっていて、これがずっと続いていくかもしれないと思っています。7月29日に芦屋市教科等研究会美術部会研究会というのを行ってくださったので、これは令和7年度ということなので、毎年度されていたみたいです。当館でしたいということを聞いておりますので、当館も何かお手伝い出来ないかなと思っています。

(岡会長)

最後に、「(2) その他」について、何かございますか。

(事務局：中村)

事務局からは特にありません。

(岡会長)

「(2) その他」については特にないのことなので、本日の議事はこれですべて終わりました。本日は、これで協議会を終了いたします。ありがとうございました。